

# 随筆・評論

野村 宗一  
山口 育子 選  
山口 一

特選

## 追憶の磯山射撃場跡

大藪 町

吉田 和 治

旧日本軍の軍事遺産、軍需産業の展示が開催されているのを知り、今年の三月に東近江市にある滋賀県平和祈念館に立ち寄った。旧八日市飛行場や近江絹絲紡績株式会社の航空機部品製作現場が、数十点のパネルと共に分野ごとに並べられていた。

数多くのパネルの中から、一枚の写真と解説文に目を見張った。「磯山射撃場監的壕」と書かれていた。その下には、苔むしたコンクリートの構造物が写っていた。そこは、まさしく私が子どもの頃によく遊んだ見覚えのある所であった。当時から射撃場跡とは聞いていたが、それ以上の詳しい事を教えてくれ

る人もなく、私も深く知ることはなかった。

祈念館で貰った資料によると、昭和十五年頃に近在の彦根高等商業学校、彦根中学校、長浜農業学校の生徒を軍事教練に駆り出し、この地で実弾演習を行ったと記してあった。

監的壕は長さ二十メートル、幅二メートル、高さ二メートルで横から見るとU字溝の形をしていた。その凶面まで書いてあり、おおよそのことが分かった。

それを読んでみると、急に過去のこと懐かしく思い出されて来た。私は今一度、現在の様子が知りたくなり、早速、車を米原市と彦根市の境にある磯山へと走らせた。

現場近くに着き、磯山から離れた旧県道に車を止めた。まだ春浅い頃で、何もない田園を歩いていく。耕作していない所も所々見られたが、ほとんどは往時のままであった。

送水路脇の農道を歩くと昔のことが昨日の事のように脳裏を駆け巡った。あの頃、一面に蓮華が咲く田圃で大の字になって空を見上

げていたものだ。また、幼馴染みの友だちと一緒に、日がな一日草野球をしていた。まるで昨日のことのように次々と思いついて来る。幾筋かの細い畔道を通り過し、なおもつき進むと、小さな割石が畔の両側に並んでいた。

今回、私が目指していた射撃場の入口のようだ。足元の悪い少しぬかるんだ畔道を山手へと進むと、灌木の茂った山裾となっており、行く手を阻む。やっと、頃合いの斜面を見つけて、一メートル程の段差を登ることが出来た。

その先へと進むと、また無数に折れ重なった竹材が立ち塞がる。薄暗い竹林には、妖気すら漂ってくる。

そういえば、昔からここ磯山には大蛇伝説があった。それを地域の古者からよく聞かされておき、この辺りは気をつけるようにと言われていたことが頭をよぎる。少し弱気になったが、意を決し進んでいった。

何回か、茨に刺されながらも進むと、一気に視界が開け、ようやく苔むしたコンクリートの構造物が現れてきた。土砂に半ば埋もれている所もあり、辺りの景色に溶け込むその様は、近くに寄っても分からないくらいであった。

ああ、もう六十年ぶりの再会である。しか

し、私が記憶していたのとはまったく違い、それはずいぶん小さく見えた。子どもの時の尺度では、その倍ほど大きく見えていたのだ。壕の中へ入ってみる。内部は外観と異なり、苔も生えず、きれいな状態のまま、この外驚くばかりであった。何ら長年の歳月の経過を感じさせない頑丈な物だった。

ふと目をやると、その壁面には彦根中学校の生徒がつけたのだろうか、「HT」と書かれたイニシャルが今も剥げることもなく、しかと残っていた。四角四面の融通の利かなかった時代に、このような場所にはつきりと分かる落書きがあることにむしろ私はホッとする思いがした。

それに対して、外側の射撃面の損傷ははなはだしく劣化をしており、相当古くなっていた。モルタルの剥がれた地肌は、砂利とともにシジミの殻がむき出し、こびり付いていた。射撃面は二メートルの内、下半分が土塁のように土で覆う工法を取っていたようで、私も竹の切り端で掘ってみたが、傷は見当たらず土塁がその緩衝役を果たしていたのだ。

的を外れた銃弾は、すべて後ろの山腹に当たり、それ以外の弾は土塁に当たるか、監的壕の上部に当たり、炸裂した証しである。

今なお残るその現場を見ると、年端もゆかない青少年たちがここで射撃演習をしていた

こと、そしてその後には戦地に赴いたであろうことを思うと、それだけで胸が痛む。

今となっては何に使ったか分からない遺構が苔むす状態で眠っている。これからも顧みられることもなく、朽ち果ててゆくのであるか。

この貴重な戦争の遺物をこのまま捨てて置いてよいものだろうかと考えながら、もと来た道を惜別の思いを残しながら帰路についた。

(評)

幼い日の遊び場であった旧日本軍の射撃場跡を再び訪れようと思った筆者が、荒れ果てた現地を探索時の臨場感が巧みな文章力によって強く感じられる。さらに、戦争中の建物を歴史的な遺産として生かしたいという思いがよく表現されている。

(野)

特選

## 家族の絆

後三条町

寺村和子

今から三十年前の話になる。

ある日の夜、仕事から帰った息子が、「お母さん、僕、おばあさんの所へ帰るから。」と言った。別れた夫の母が名古屋で一人暮らしをしており、そこへ行くと言うのだ。わけあって離婚した当時、息子を夫の叔父の家に預けた。夫は離婚前から行方が知れず、別れ話が出た時、叔父が、「この子は此処の跡取りだ。連れて行くなら離婚はさせない。その代わりに自分が育てる。」と言って息子を連れて行った。それから三年も経たない間に、「ぐれて何ともならないからどこかへ預ける。今さらあなたに返すことも出来ないし……。」

叔父から電話があった時、その場ですぐに自分が引き取ると言い、実家の両親の反対を押し切り、中学校三年生の息子、小学校六年生の娘、私の三人の生活が始まった。

息子の開口一番、「お母さんと呼ぶけど、おばさんとしてしか思っていないから……。」父親に出ていかれ、母親にも見捨てられたと

思っていたそうだが。言葉の通り、息子の態度はひどかった。ぐれていくというので覚悟はしていたものの、気にいらないと手を出し、唾を吐きかけたり、怒鳴ったりと言えない事が山程あったが、これも自分の罪と思い、耐えていた。

さすがに妹には手を出さず。とてもやさしく接しており、娘は、私から話を聞いていたので口を出す事はなかった。

息子が高校生になった。相変わらずの不良と呼ばれる行動はますますエスカレートし、髪の毛は赤く、爪にはラメ色のマニキュアを塗り、校則違反は当たり前前の生活の中で、私は生徒指導の先生と顔なじみになっていった。高一の夏休みの前に、いつも通り学校から電話があり、今度は何をやったのかと正直うんざりしながら行ってみると、酒とタバコを自動販売機で買っているという。「この子をお寺に預けたいと思う。」と先生。今まで何人かを預けたと言う。少し考えた末、「お願いします。」と頭を下げた。夏休み前だったので、休みに入ったら一週間程…という話になった。その事を息子に話したら、思わぬ返事が返って来た。「良いよ。別に。俺は他人に預けられるのには慣れていくから。」私は返す言葉がなかった。そして一週間、息子は逃げ出す事なくお寺で生活をした。先生は驚いてこんな話をしてくれた。「今まで何人かの子

を送ったが、大抵、三日までには逃げて帰って来た。一週間もいたのはこの子が初めてです。」先生に息子を引き取った経緯を話したら、「そういう事があったのですか。少し、違う方向で息子さんと接してみます。」と言われた。それから息子の態度が少しずつ変わっていったように思えた。

息子は引き取ってすぐに新聞配達をし、高校生になるとアルバイトを二年間休まず続け、就職は、アルバイト先で正社員として迎えられる。働く事にはとても真面目だった。ぐれてはいたが、人に危害を加える事はしなかった。二年生になると不良生活もだんだん収まり、学校からの呼び出しもなくなり、どこにでもいる普通の高校生になっていた。友人といえ、やはり不良の子が多かったが、大体、自分の家に連れてくるのだ。そして「お母さん、お茶を入れて。」と言う。「はい、はい。」と嫌がる事もなく、お茶とお菓子を出していた。その内、友達の顔がおなじみになり、三人の子がまるで家族の様に居つくようになった。其の頃は、不良の面倒を見ていたようだ。庭にコスモスが咲き乱れている夏の終わり、息子が、「僕、お母さんと暮らして良かった。」と言ってくれた。息子の前で大きな声で泣いた。息子はその時、初めて自分の気持ちを話してくれた。叔父さんの家での事、父と母に捨てられ、又、母に引き取られるよ

うになった自分の事など…。今では感謝していると言ってくれた。

息子と暮らしたのは四年間。その間に実に様々な事があった。

「おばあちゃんのお所へ帰るけど、次はお母さんだよ。」と言う。そんな事出来る筈がないと分かっていても、「待っているからね。」と送り出した。

あれからもう、三十年にもなるのだ。お互い、生活も変った。息子は結婚し、孫も二人私に与えてくれた。何よりうれしかったのは、私が「忍」という字が好きで、玄関に額を立てていたのだが、息子に紹介された彼女が、「忍といいます。」と言われた時のびっくりした事。家族に忍ちゃんが来た！と思わず抱き締めたのを昨日の事のように覚えていく。

「家族の絆」息子、娘、嫁、孫などいろいろな形で結ばれている絆。まだまだ人生は長い。これからも出会い、別れがいくつもあると思う。その絆を大切に、人を大切にしてこれからの生きて行きたいと思っている。

(評)

筆者の書き留めておきたい思いが、全篇に溢れている。息子に寄り添い、立ち直っていく過程を見守ってきた筆者は、学校、寺、先生、友人などと息子との関りや交流を、抑えた筆致で淡々と描いている。各々のエピソードが、臨場感をもつて読者の心に響き、余韻の残る秀作である。

(育)

## 美への願望

後三条町

江畑民子

半年前、母の妹が九十五歳で亡くなった。告別式での最後のお別れの時、お化粧が映え、生きてる錯覚を思わすほどに美しかった。この齋場は、前夜にエステをすると聞き、みんなびっくり仰天だ。死者にエステである。想像もできないことだった。

『最高の美しいお顔で、皆様とお別れして頂く』がこの齋場の売りになっているのだ。数多い齋場は、競争が激しく他社に無いイベントが必要なのである。

叔母の娘は、死者に優しいエステがあると知り、

「苦勞の多かった母親を、最高の美しい顔で送りたいかった」と語ってくれた。叔母は生まれて初めてのエステを受け、美しい顔で天国に行ったのである。

法事の後に姪がエステの話をした。

「私ね、エステに行ってるんよ。自分へのご褒美や」

「静かな部屋で、エステティシヤンの魔法の

手でマッサージュやパックをして貰って、うとうと眠って、幸せなひと時やわ」

エステとか綺麗になる話は、誰もが興味津々だ。身を乗り出し、姪を囲んだ。

「他にどんなことしてくれるんや」

「お金はいくらかかるんや」

質問が飛交う。みんな真剣に聞いている。

「予約制だから、静かに受けられるよ」

姪がいろいろ説明していた。

年々暑さが激しくなり、熱中症が叫ばれている。エアコンは一日中使用している。大型スーパ―にある椅子は、涼を求める人々で溢れ、空席は何処にも無い。

エアコンで肌が乾燥し、水分、油分を補っても効果は無い。そんな時、以前姪が話していたエステを思い出した。

「一回目は体験だから、サービス価格だよ」思い切ってエステに挑戦だ。詳しい内容は解らない。心臓が波打っていた。

「ようこそ、いらっしやいませ」

優しい声に、緊張が少し緩んだ。エステティシヤンの顔がピカッと輝いていた。六十代後半と聞いていたが、シワは年相応にあり、少しホツとした。エステティシヤンは美しくなければいけない。来る人に夢を与える仕事だからだ。

部屋は相当冷えているのに、汗が流れ落ち、

痛いほど両手を握り、緊張していた。

「一番に希望されることは何ですか」

一瞬、あれもこれもと頭の中が交差したが、

「シワは仕方ないので、肌の艶が欲しいです。

輝く艶です」

「解りました。私の腕にかけて、輝く肌になりますよ。美意識高いですね。素晴らしいことです。任せて下さい」

ある化粧品会社のエステだった。

ベッドに横になった。周りは暗く、和室の天井の木目だけが眼に映った。高級そうな滑らかなクリームが塗られ、マッサージュが始まった。やわらかい手が滑るように動いて行く。強くも弱くもなく、心地良い感触は、肌を生き返らせる。蒸気を当て、毛穴を開け、次は冷たい化粧水パックだ。水分がシワに潤いを与える。そして、アルミ箔で覆われた。

「はあい、眼を覚まして下さい」

その声で眼が覚め、自分がエステに来ていることに気が付いた。眠っていたのだ。

「さあ、楽しみですよ。美しい肌ですよ」

水分たっぷりのしっとり肌、眼が大きく変わった気がする。部屋が暗いせいか、シワは見えない。

「あなたの年齢では、この二種類が必要です。ね。ストックして下さいね」

一個の値段は二万円を下らないだろう。一個



は三回程で使い切るらしい。計算しながら、冷めていく自分がいた。

化粧品会社は、高価な品を売る目的もある。肌の衰えから見ると、私は最高に良い客なのである。鏡につこり微笑んで見た。シワも可愛いではないか。年相応である。

これ以上、私は何を求めているのか。高価なパックだからと、一回に大きな期待をするよりも、ドラッグの安価なパックを回数多くするのが、効果はあると雑誌で読んだ。

作家の向田邦子さんの言葉によると、「パックは、自分で自分に催眠術をかけるのだ。つまり自己暗示をかけているのだ。この自己暗示と言うのは、女を美しくする最高の化粧品である」

「パックの魔力は肌だけでなく、顔立ちまで美しくなりそうな、女性に生きる夢を与えてくれるところにある」

パックは肌よりも、精神を安めるためのものなのだ。パックを剥がす時の瞬間は、美しくなっていると確信しているからだ。

確かにパック後の肌はしっとり潤っている。そう思える。これが一番大事なのである。人の手を借りなくても、自分に催眠術をかければ、美しくなると信じられるのである。

自己暗示のための催眠術なのだ。

(評)

思い切ってエステを訪れ、美肌術を初めて体験する様子に、年を重ねても美しくありたいと思う女性の気持ちが素直に書かれている。

エステ店の高価なパックより、自分がいつも使っている安価なパックで自己暗示をかける方が、女性を美しくする最高の化粧品だという結びに共感できる。

(野)



入選

## カマキリの引越

日夏町

田中 恵子

車に乗ってふと助手席の窓を見ると、カマキリが一匹、ガラスの向こうに止まっていた。朝の一面の青空にカマキリの緑が美しかった。私は虫に対して知識がない。バッタもイナゴもコオロギも見分けがつかない。カマキリは分かる。他の虫に比べて長身で格好が良い。前足が鎌の形をした肉食の昆虫である。

私はカマキリに声をかけた。

「出発しますから、降りてくれませんか？」

だが全く動く気配がない。運転席に座った私の目の高さと同じぐらいの位置にいた。エンジン音をかけた。

「遠い所へ行ってしまうので、降りた方がいいと思うで」

と再度、呼びかけた。遠いといっても車で十分あまりである。

今朝、七時半、湖岸道路を走って、琵琶湖沿いの石寺町の彦根梨の集積所に着いた。毎年八月末からここで彦根梨の直売がある。九月中頃の今日で三回も買いに来ている。毎回

行列が出来ている。売り出し開始の八時から一時間も経たない内に完売する。ビニール袋に五・六個の彦根梨が入っているのだが、一人二袋しか買えない。並んで買うだけの値打ちが充分にあるおいしい梨なのだ。

駐車場に止めた時には、窓にカマキリは居なかった。四十分ほどして梨を二袋下げて戻った時に、そこに居座っていたのだ。

出発した。風を受けて降りたくても動けないのではと思いい立ち、途中、川べりの広い所で止まってみた。

「ここら辺りで降りたらどう？」

相変わらず、触角をピクツともさせず、六本の足でくっついていた。仕方なくまた走り出した。自宅に着いた時、同じ場所に同じ姿勢で頑固に止まり続けているカマキリを見た。

「もうあなたになんか構っていられんわ」

夫が畑から戻っているだろう。まず朝ごはん。

小走りに家の中に入った。

朝食の後、子ども二人と東京にいる大学生の孫に荷物を送る準備をした。まず彦根梨。夫が採ってきてくれた野菜とお菓子をダンボールに入れた。彦根梨を送るのはこの夏、二回目だ。前回、今年は特においしい、近くで売っている梨とは全然違うとみんな言ってくれた。それが嬉しくてまた送ってやりたい。

三つの箱を自動車に積み込んだ時、カマキリを思い出した。ガラス窓にその姿はなかった。この土地を新しい住みかとして決めて、降りてくれたのだろうか。

夕方六時すぎ、裏口より外へ出た。暗くなくかけていた。

私の家の周囲は去年と全く様変わりした。去年まで南側と西側は一面田んぼだった。八月末から九月中ばの今頃まで、どの田んぼでも田刈りが行われていた。すぐ南の田は九十歳近いおじいさんが独りで朝五時頃から機械を動かした。その向こうの田では、毎年、五・六人が集まった。子どもの声も混じっていた。西の田んぼは七十歳位の夫婦が一日中、働いていた。その向こうもその向こうにも田刈りに励む人の姿があった。

みんな一斉に止めてしまった。

すべて太陽光発電になるという。一月から始まった工事は五月中ばで中断し、九月に入っても再開していない。材料不足とか人手不足とか、近所の人が言っていた。

荒れ放題である。私の背丈の二倍以上の雑草がぎっしりと伸びている。我が家のすぐ南の土地は砂利やセメントがまかれ、むき出しの土の間に低い雑草が少しずつむらがついている。雨の降った後には穴ぼこがあちこちでき、水たまりになっている。

ここに住んで四十五年になる。辺りは随分と変わった。前の道は舗装され、二車線道路となった。家から見える所にスーパーが出来、ガソリンスタンドが出来、コンビニが出現した。それでも田んぼはあった。そこから人の声がした。私は四十五年間、稲の優しさに満たされてきた。これからはそれを感じることはない。

あのカマキリはこの土地に降り立ち、呆然としたことだろう。

「えらい所に引越してきたものだ」

だから何度も車から降りるように促したのだ。前の住みかの石寺町では緑の豆畑が琵琶湖岸まで広がっていた。田刈りが終わっていない田んぼが明るく輝いていた。

カマキリは中国の故事にも出てくる昆虫だ。鎌のような前足を振り上げて、馬車の車輪を叩こうとした。はかない抵抗をすることの例えと言われるが、カマキリは何千年も昔から、目の前に立ちほだかる物体を敵とみなして戦ってきた。その生活様式を守り、子孫へと命を繋いできた。

コオロギが鳴き出した。この土地にも雑草は充分に伸びている。カマキリの餌はあるだろう。踏ん張って生きていってほしい。

(評)

カマキリとの出会いを通して、田圃の減少など周辺の様変わりと言及する。その中で、何千年も前から「生活様式を守り、子孫へと命を繋いできた」カマキリに、「踏ん張って生きていってほしい」とエールを送る。身近な対象から生活や環境に思いをいたしながら、ほのぼのとした読後感がある。

(育)



## 入選

# 虹は何色に見えますか？

小泉町  
北村 薫

二、三日前、久しぶりに虹を見た。その日はおそらく天気有加減だったのだろう、形を変え、位置を変えながら、断続的にはあるがほぼ一日中、空のどこかに見えていた。虹は、太陽の光が大空に漂っている雨や霧の粒のせいで屈折したり反射したりする結果、いくつかの色の帯に分かれて見えるものらしいから、太陽が動いていく以上、一日じゅう空のどこかで虹が見えるというのは何となく納得できた。くわしい理屈では、虹の見える位置や形などは、太陽と雨や霧の粒、それと見る者の三者の位置や高さの関係によって決まってくるらしいのだが、虹を見た当日はそんなことを知る由もなく、自分なりに「何となく納得」することで済ませていた。

それはともかく、虹は英語では rainbow という。この語は rain (雨) と bow (弓) に分けられるが、その成因と形状から考えるとなるほどうまく言い表している。言葉の成り立ちを考える上で、これほどわかり易い例もそ

う多くはないのではないか。

翻って漢字では「虹」の字を当てている。見慣れた漢字として見過ごしてしまえばそれまでだが、ちよつと立ち止まると、なぜ虫偏の字なのかとの疑問に思い至っても不思議ではない。虹は、昆虫などの虫とはまったく無縁の現象と思われるのに、なぜ虫偏の字が使われているのか。

調べてみると意外なことがわかった。それは、虹の字の「虫」は昆虫などの虫のことではないというのだ。古代中国では「虫」の字を「キ」と読み、蛇を形取った象形文字で、へビ、なかでもマムシに代表される毒蛇のことをいうらしい。一方、旁の「工」は「つらぬく」を意味するという。ということから、古代中国では、大空にかかるニジを、天空を貫く(工)へビ(虫)に見立てて「虹」の字で表したのだということらしい。なるほど、こちらも rainbow ほどストレートではないにしろ、その文字の成り立ちを考える上では適っているのである。

ところで、虹の色という七色に決まっているものと思っていたが、世界的にみるとどうもそうでもないらしい。例えばアメリカやイギリスでは六色、ドイツやフランスでは五色というのが一般的らしい。さらに、台湾に住むブタン族によると赤・黄・紫の三色だと

いうし、南アジアのバイガ族に至っては赤と黒の二色だという。彼らは、赤や黄の明るい色か、青や紫の暗い色かという具合にザックリと分けているかららしい。そんな世界の実態から考えると、虹の色が何色に分かれて見えるかは、実は波長を基にして色分けするというような科学上の問題ではなく、さまざま文化や思想を背景とした、いわば人々の内面から生まれてくる問題なのかもしれない。つまり、何色に「見える」かではなく、何色と「見る」かなのだろう。

このことに関して、実に示唆深いことを知ることになった。虹の色の根源は太陽の白色光であることから、七色にしろ、六色、五色にしろ、それぞれの色を明確な境界で分けることはかなり難しいに違いない。この考えのもと、ならばいくつかの色が集まっている虹は、むしろ分けないうちに意義を見出す「多様性」や「共存」の象徴であると捉えるべきだとして、その具現化を目指して、LGBTの活動を支える旗（レインボーフラッグ）に採用されているというのだ。このことを知ったいま、これは虹は何色かを論ずる時のもう一つの答えになるかもしれないと思っている。

（評）

色の認識は、文化や思想を背景として、何色に「見える」かだろう、と考える筆者は、LGBT（性的マイノリティ）の活動を支える旗・レインボーフラッグに採用されている「虹」が、分けないうちに意義を見出す「多様性」や「共存」の象徴であり、その具現化を目指しているのだと捉える。筆者の視点で、メッセージを発信している。

（育）



佳作

## 彦根の山に雲かかる

野瀬町

中山敬一

佳作

## 介護と看取り

日夏町

成宮 恵津子

佳作

## 彦根城博物館の展示品から

本町一丁目

中島 暉枝

佳作

## 修学旅行

芹橋一丁目

楠 亀 美恵子

佳作

## 再会

大藪町

外村 輝夫



## 《総評》

表現への意欲も創作への熱意も容赦なく削ぎにかかるのは、収束の兆しも見えない新型コロナウイルスへの不安と恐怖。一年以上つづく心身の窮屈さは、ボディ・ブローのようにじわじわと私たちを苦しめています。

本年度は、十九点の力作が集まりました。今年はコロナ禍に言及する作品がほとんどありませんでした。

少し驚きました。しかしそれは嬉しい気づきでもありませんでした。

身近な自然や小さな生命に目を向ける。大切な思い出に触れる。

状況を踏まえながら可能な範囲で行動し、見聞をひろめる。

人と人との繋がりを思い、平穏な日々でありがたさに感謝する。

（あらためて）丁寧なものを見る、考える。

そうした文芸活動の実践こそが、どんな状況においてもしっかりと地に足をつけ、前を向く力になるのだと、感銘を受けました。

どの御作も素晴らしく、選考は難航しました。

山口 一

